

2021年度(令和3年度)学校評価自己評価表

神辺西中学校区	校番74	福山市立神辺小学校
最終更新日		2021年(令和3年)10月1日

I 福山市

<p>ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。</p> <p>ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。</p>

II 中学校区

<p>前年度学校関係者評価の主な内容</p> <p>1. 児童が学び方の経験を活かしたカリキュラム編成や学級単位にとらわれない授業形態等を工夫する。</p> <p>2. PDCA サイクルをもとに、児童生徒の学びや活動を充実させ、改善を図る取組を継続していく。</p>	<p>児童生徒の現状</p> <ul style="list-style-type: none"> • 学びの伸びを把握する調査では、当該学年のレベルに達していない児童がいた。 • 小中ともに「言葉遣い」「掃除」の肯定的評価が低い。特に言葉遣いの取組が必要である。 • 「体力づくりに取り組んでいる」肯定的回答88%。新体力テストは2020年度未実施。県平均値を越えた割合、一昨年度46%。 	<p>育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)</p> <p>めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)</p> <p>中学校区として統一した取組等</p>	<p>スキル：知識・技能 思考力・判断力・表現力 学びに向かう力 倫理観：思いやり</p> <p>知：自分の考えを持ち伝え合う子 徳：人の気持ちがわかり協力できる子 体：健康でねばり強い子</p> <ul style="list-style-type: none"> • 「子ども主体の学び」全教室展開の実現を目指した授業改善の継続 • 児童生徒による生徒指導(生活のきまり)の見直しの継続 • 神辺西中学校区における「21世紀スキル&倫理観」の評価規準による個に応じた支援の継続
--	--	--	---

III 自校

<p>ミッション</p> <p>伝統を現在に生かし、未来を生き抜く人を育てる。</p>	<p>育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)</p>	<p>知識・技能</p>	<p>思考力・判断力・表現力</p>	<p>学びに向かう力</p>
<p>学校教育目標</p> <p>ひとりひとりの命を生かし 育てる教育の実現</p>	<p>めざす子ども像</p>	<p>既習事項と新たな知識・技能を関連付け、思考・判断・表現の場で活用できる知識・技能として定着している。</p>	<p>課題解決のために必要な情報を収集し、比較・分類したり関連付けたりして、筋道立てて考え、表現している。</p>	<p>既有的知識と関連付け、自ら課題を見つけ選択するとともに、学習の仕方や進め方を振り返り、次の学習や生活に生かそうとしている。</p>
<p>現状</p> <p><児童生徒></p> <ul style="list-style-type: none"> • 「自分や友達のためになることを考えて実行できている」と自己評価する児童は全体の91%であり、増加している。今後、自分の周囲に対してだけでなく、学校や地域等へ貢献しようとする気持ちや実践力を育てるため、すべての活動を通して児童自ら企画できる場を設ける必要がある。 <p><授業></p> <ul style="list-style-type: none"> • 児童が自己の学力を伸ばしていけるように、教員が、児童一人一人の伸びを見取る評価力を高めていく必要がある。 • 児童の学びに向かう姿には、個人差があり、児童の発言に対して柔軟に対応し、学びを繋げていく教師のファシリテーター力を高めていく必要がある。 	<p>テーマ</p> <p>自ら学び続ける子どもの姿を目指した新しい仕組み</p>	<p>研究 内容等</p> <p>1 児童が自ら学びをデザインする</p> <ul style="list-style-type: none"> • 児童が自分の関心や習得の段階に応じて課題や学習方法を考え、選択する • 児童自身が学びのプロセスに目を向け、学び方を修正したり、自己の伸びを実感したりできる振り返り <p>2 子どもたちの多様な学びを尊重した授業</p> <ul style="list-style-type: none"> • 教科・学年を越えた学びのカリキュラム • 総合的な学習の時間の単元開発(縦割りでの学び、教科発、個人テーマ) • 児童の学びの過程に即した評価の見直し及び教員の評価力向上 	<p>めざす授業の姿</p> <ul style="list-style-type: none"> • 児童が主体的に取り組み、学ぶ楽しさを味わうことのできる授業 • 身に付けた既習事項を活用して、新たな課題を解決することのできる授業 • 友達と共に学ぶよさを実感できる授業 	

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立神辺小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	力 評 価	達 成 評 価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経 営 目標の達成状 況	力 評 価	達 成 評 価	総 合 評 価	改善方策
2	自己の学びを デザインでき る児童の育成	★	継 続	<p>児童自身が学びのプロセスに目を向け、学び方を修正したり、自己の学びを実感したりできる振り返りを行う。</p> <p>子どもたちの多様な学びを尊重し、教科・学年を越えた学びのカリキュラムを開発する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 単元の前後で自己の学びの段階や伸びを記録し、比較したり、他単元及び他教科、生活等とつなげたりできる振り返り方法やシートを工夫する。 「認知の仕組み」をもとに、教員が、児童の具体的な姿から「学び」について話し合う場を設定する。そして、それをもとに、4月に作成したカリキュラムの修正を重ねていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童アンケートを通して、自己の学びについての意識を調査する。 教員の振り返りや児童の具体的な伸びの姿を、学期に1回以上交流し、成果と課題を挙げる。 カリキュラムマップの改善を継続する。 教員の振り返りや具体的な取組事例及び児童の学びの姿を、学期に1回以上交流し、成果と課題を挙げる。 「認知の仕組み」について研修を実施し、教職員で児童の具体的な姿について共有した。各学年の指導内容のみに捉われず、児童の興味・関心に基づく課題や学習内容を取り上げた柔軟な単元構成を行うなど、課題を明らかにすることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分で学習の課題を決めたり、考えたことを選んでの意識を調査したりして、学習を進めている児童が85%であり、学習を通して表現する力が伸びたと感じている児童が83%である。 教職員で児童の具体的な姿について共有した。 他教科との関連を図りながら、単元の入れ替えを行うなど、随時、各学年で学習内容をつなぐカリキュラムマップの修正を行っている。 「認知の仕組み」について研修を実施し、教職員で児童の具体的な姿について共有した。各学年の指導内容のみに捉われず、児童の興味・関心に基づく課題や学習内容を取り上げた柔軟な単元構成を行うなど、課題を明らかにすることができた。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 学習前、学習途中、学習後に児童自身が学びの振り返りを行う場を設定し、自分自身の成長や学び方について意識できる場を設定する。 2学期以降で、学期に1単元以上、児童の学び方や振り返りの在り方に重点を置いた単元を設定し、児童の姿を通して、指導者が振り返りを行い、成果と課題を明らかにする。 学習内容をつなぐカリキュラムマップの見直しを行う機会を設定する。 児童の発言や記述から、児童の興味・関心や疑問、物事の捉え方などについて、エピソードとして具体的に記録し、職員間で交流することを通して、「認知の仕組み」に基づいたカリキュラムマップの改善に生かす。(カリキュラムマップが学年の枠を超えることを妨げない。) 	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経 営 目標の達成状 況	力 評 価	達 成 評 価	総 合 評 価	改善方策

2		★	継続	<p>児童が、学校や地域のためになることを考え、実行できるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> •教育活動において、何が学校や地域のためになるかを児童が話し合い、企画・実践できる場を設ける。 •PDCAサイクルに基づいた、活動の振り返りを行い、取組の効果が実感できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> •児童による振り返りや児童の具体的な伸びの姿を、学期に1回以上交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> •周りのことを考えて行動しようとしている児童は、86%である。児童は、自身のタブレットの使い方を多角的に捉え、見直し、約束作成をすることができた。 	3	4	<ul style="list-style-type: none"> •企画の中心となる児童のみが取組を行うのではなく、現状への課題意識や目的を他の児童とも共有し、全校児童を巻き込んだ教育活動を展開する。 •児童どうしが取組の効果を評価し合える場面を設定し、自己有用感を高める。 					
2			継続	<p>積極的に運動に親しもうとする。 目的に合わせて目標を設定し、体力向上ができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> •全校で運動に親しむ時間を設定するなど、運動について児童同士が交流する機会を設ける。 •運動例を示すなど、児童が自分で運動を選べる環境を整える。 	<ul style="list-style-type: none"> •児童が活動できる体育的イベントを学期に1回以上実施する。 •「運動に取り組んでいる」児童の割合を80%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> •体育委員会の発案により、ペア学年によるドッジボール大会を開いた。 •外遊びやマイプランによって運動に積極的に取り組んでいる児童は85%である。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> •全校が取り組める体育的イベントを、児童が主体となって継続的に実施する。取組状況を受けて改善していく。 •取り組んでいる運動の交流や、体育の授業との関連を図るなど、運動することへの意欲向上をねらって取り組んでいく。 					
2	児童の教育環境をデザインする取り組みを推進する		継続	<p>小中一貫教育の推進を図り、各校の取組を検証し、情報交流をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> •小中合同研修会を年間2回以上、各部の主任・主事による連携を3回以上行う。 	<ul style="list-style-type: none"> •中学校区として、統一した取組を各部会で継続して推進している。 	<ul style="list-style-type: none"> •小中合同研修会を開き、中学校区で小学校から中学校へつなぐ話し合いを行った。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> •小中合同研修会で学習活動、生徒指導、保健体育部で交流したことを3学期に実施できるように取組を考えていく。 •中学校の教員が小学校の様子などを見回るなど小中9年間を見守る体制をつくる。 					

			継続 教職員一人一人の働き方に対する意識の醸成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・超過勤務45時間以内を目指し、教職員の主体性を尊重した自己管理を行う。 ・行事及び準備時間の精選や教科横断的な単元づくりを通して、子どものために学びつくりに向けた場や時間を確保する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学年単位で、45時間以内を意識する声かけを、100%にする。 ・職員アンケートにおいて、「子どもたちのために使える時間を確保できている。」と、肯定的評価する職員を90%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・45時間以内を目指し、各学年内で声かけを行っている。(職員アンケート96%達成) ・夏季休業中の業務改善職員研修を受けて、「おしゃべりタイム」など子どもたちへの学びに向けた時間を確保している。(職員アンケート75%達成) 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・各主任を中心に声かけしていく。主任だけでなく、時間を見て周りの教職員へ声かけを行っていく。 ・職員研修を受けてカリキュラムマップの改善を行い、単元や教科をつなぐことで、使える時間を確保していく。 					
--	--	--	--------------------------------	---	--	--	---	---	---	--	--	--	--	--

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。